

# 低炭素社会における「カワイイ移動体」と

## その有効性に関する研究

### A Study on the KAWAII-Vehicle

### and it's Relevance to the Low Carbon Society

研究代表者: 龍谷大学社会学部教授 工藤保則

(Ryukoku University Faculty of Sociology , Yasunori Kudo)

共同研究者: 武庫川女子大学生生活環境学部教授 藤本憲一

(Mukogawa Women's University Faculty of Human Environmental Sciences ,  
Kenichi Fujimoto)

奈良女子大学文学部准教授 寺岡伸悟

(Nara Women's University Faculty of Letters , Shingo Teraoka)

低炭素社会において主役となるであろう「あらたな移動体」は、そのかたち・デザインは現在のものとは変わってくるように思われる。他のものに先んじてデザインの変化があった電車には「カワイイ」ものもあらわれ、電車マニア以外にも「乗りもの」としての楽しさ、「乗ること」の楽しさを与え、さらには地域の変化までうんでいる。またこの「カワイイ」という感性は、現在、デザインや建築の分野において特に注目されるものであり、その重要性は他分野へも広がってきている。

本研究では電車の事例等にも学びながら、このあらたな「カワイイ移動体」について、「ものと人の社会学」的見地から、また「情報美学・生活美学」的見地から実証的な研究を行う。同時に、自己-他者間の、また自己言及的なコミュニケーションとも深くかかわる「カワイイ」という美意識そのものについても考えていく。

The shape and design of the "new vehicle" which is highly appreciated in a Low-Carbon society is significantly different from that of the current vehicles. For example, we can see the train whose design has already changed. They describe these new trains as being "Kawaii (cute)". People find a fun like a toy and a pleasure of "riding" in them. There is also the case which has made a community change. The sense of "being Kawaii" attracts attention also in the field of design and architecture, and the importance has spread to many other fields. In this research, we study this "Kawaii-ness", from the sociological and an "information aesthetic and life aesthetic" standpoint. And we consider the structure of the aesthetic sense of "being Kawaii." The consideration will be deeply concerned with the self-referential communication and with the communication between the self and others.

## 1. 研究目的

建築界のノーベル賞といわれるプリツカー賞を2010年に受賞した妹島和世の建築は、「カワイイ建築」ともいわれる。妹島の影響もありゼロ年代以降の建築では「カワイイ」という概念が注目され始めているが、それは少し前まで主流であった「力強い建築」とはまったく異なる潮流である。この流れは建築の世界以外にも広がっていているように思われる。世の中の流れとして、重厚長大だったものがカワイクなっているのである。

さて、低炭素社会において主役となるであろう内燃機関を動力としない「あらたな移動体（つまりはEV）」では、おもいきったクルマというものの捉えなおし（「重厚長大」な工業製品、ということの捉えなおし。かたち・デザインの捉えなおしも含まれる）が行われると考えられる。この「あらたな移動体」における「（従来のものとの）かたち・デザインの変化」、つまりは「カワイイ移動体（カワイイEV）」の誕生は、私たちの生活上の価値観や文化の変容を生むかもしれない。実際、クルマより一足早く「かたち・デザインの変化」がおこってカワイクなった一部の列車は、鉄道マニア以外にも「乗りもの」としての楽しさ、「乗ること」の楽しさを与えている。

本研究では列車の事例にも学びながら、「カワイイ移動体」について「ものと人の社会学」的観点から、また「生活美学」的観点から実証的な研究を行う。同時に、自己-他者間の、また自己言及的な、コミュニケーションとも深くかかわる「カワイイ（/カワイイ）」という美意識そのものについても考えていく。

## 2. 研究経過

2か月に1度のペースで研究会を開催し、議論を深めていった。研究会では、奈良女子大学鈴木康史准教授（身体論）、武庫川女子大学荒川美世子講師（映像論）他を迎え、研究代表者・共同研究者の専門分野とは違った角度からの議論も積極的に行った。

## 3. 研究成果

### 1) かわいいの諸相

美術・工芸からみると、日本には古くからかわいいという感覚が発達していたと考えられるが、近代（明治）に入るとその感覚はいったん姿を消す。力強さが大きな意味を持つようになり、かわいいにつながるゆるさや素朴さは忘れられたかのようになる。その後、大正・昭和初期になると竹久夢二や中原淳一が活躍し、かわいいが復活してくる。戦中、戦後にはまた姿を消すが、1960年代になると内藤ルネの、1970年代には水森亜土のイラストが人気を得る。70年代はかわいいカルチャーや風俗が一気に広がった時期といえる。

1970年代のかわいいカルチャーや風俗の影響を受けてなのだろう、かわいいが研究され始めたのが1980年代である。そこでいわれたことをまとめると、かわいいとは未成熟なものに親和的な感性、未成熟なものから受ける感性、とすることができる。あえて、ステレオタイプのいうならば、「おんな（少女）子どもの感性」、「おんな（少女）子どもに関連づけられる感性」となるだろうか。

### 2) もうひとつのカワイイ

上で簡単にまとめてはみたが、現在では、実際は「なんでもかわいい」となっている。

それぞれがいいと思うもの・好きなものを指してかわいいという言葉を使っている。一方では、どういうかわいいにも含まれない、かわいくないもの・かわいくはならないものもある。それらは、端的にいうと「おとこおとな」なものである。

かわいくないもの、つまり、かわいいから最も遠いもののひとつに「建築」がある。建築は重厚長大、権威、カリスマ性などが幅をきかせる分野である。そういう建築の世界にも「カワイイ」があらわれてきた。妹島和世と西沢立衛のSANAAに代表される現代日本のトップランナーによる作品は「カワイイ」と評される（「金沢 21 世紀美術館」「十和田現代美術館」など）。また「カワイイ」とよく似たことを指して、隈研吾は「負ける建築」、塚本由晴は「小さな建築」といっている。このように、重厚長大な領域においても変化が起こっている。かわいくないからカワイイへと変わってきているものである。

ここまであえて説明しないできたが、ひらがなの「かわいい」とカタカナの「カワイイ」は意識して使い分けている。カタカナの「カワイイ」については、真壁智治＋チームカワイイの『カワイイパラダイムデザイン研究』（2009 年、岩波書店）に詳しい。

真壁は「デザインや建築のあり方が 2000 年ころを境に、急速に変わり始めてきた。気持ちよさや優しさのような、柔らかで、瑞々しく、温かみのある感性が、デザインを通してより強く体現されるようになってきたのだ。荘重感よりは軽快感、強さよりもか弱さ、しかつめらしさよりは親しさ、厳格さよりは緩さ、緊張感よりは穏やかさ、

規則感よりは余白感。使い手の能動性や主体性を引き出す身近な対象として、『デザイン』や『建築』が存在しうるものになってきた」という。そして「・二次元的（平面的） ・重さがない（軽い） ・生命体ではないのに愛嬌がある（生命的、アンバランス）」「重み、威圧感がない。プラス効果のイメージネーション」のデザインや建築をカワイイとした。

真壁はカワイイの効果を強調する。それは「カワイイには心に感じられる感覚、感情、心理の問題があり、特に、『気持イイ』、『ヤサシクナレル』、『癒サレル』といった気分」のことであり、「楽しかったし、軽やかにふるまえて新しい自分に出会うことができた、という喜びが感じられる」ためである。

真壁がいうカワイイは、おんな（少女）こどもに親和的なかわいいを除いたハイブローなものであり、それを五十嵐太郎は「スマート感、小ぶり感、その上でのキャラ感」といった（2011 年 3 月 4 日の武庫川女子大学生活美学研究所で行われた研究会での発言）。

#### 4) カワイイクルマ

クルマはこれまで重厚長大なものとしてきた。CO<sub>2</sub> を排出し力強くそして速く走ることを自らの存在証明としてきた。しかし、そういうクルマは、この頃では、「売れない」「若者が興味を持ってくれない」といわれるようになっていく。その理由は、人びとの趣味やライフスタイルの変化に求められることが多いが、「今のクルマが時代に合っていないから」ということも考えられないだろうか。つまり、いまだに重厚長大なものであり続けているため人びとから興

味を持たれなくなった、と考えることもできるのではないか。

「かたち・デザインの変化が人々の意識や行動を変える」の例として列車をあげることは、現在ではそれほど不思議ではない。水戸岡鋭治のデザインした列車はカワイイ。それらは事業者の視点からではなく需要者の視点からデザインされているのだが、乗るとウキウキした気分になり、居心地もいい。またスピード第一ではないのが逆にこちよく感じられる。その感覚を求めて、多くの人が水戸岡デザインの列車に乗るために出かける。

鉄道とともに「おとこおとなのロマン」の対象であったのがクルマである。その「おとこおとな」な領域においてもカワイイが広がる中、スマートで小ぶりの（おそらく超小型となるだろう）キャラ感のあるカワイイクルマがあってもいいだろう。その可能性を考えると、カワイイクルマはEVとしてなら存在しうるかもしれない。EVは電池とモーターで動くため部品も少なく、カタチの制約も少なくなるからである。

そうならば、列車でおこった変化と同じように、スピードやその制御とも離れ、恍惚ではなく緩やかな速さによる悦楽とでもいべき感覚がこちよくなってくるだろう。トコトコと走る感覚、渉る（移る）感覚を楽しむようになるだろう。極端に言えば、馬車的な感覚から牛車的な感覚への変化がうまれるのではないだろうか。

また、カワイイデザインのコミュニケーション的意味を考えるならば、新しい五感とのかかわりが生まれてくるだろう。「気持ちいい」「ヤサシクナレル」「癒サレル」存

在としてのカワイイEVと人とのかかわりが生まれると思われる。つまり、カワイイEVは乗る人の人格や感性とより積極的につながる存在になると思われるのである。現在までの流線型をした大きなクルマは身体感覚をこえ、まるでモビルスーツを操縦するみたいな感覚になるが、カワイイEVではそれにつつまれて一体化するこちよさを感じるだろう。それはからだにあったこざっぱりした服を身に着ける感覚、といえるだろうか。

#### 4. 今後の課題と発展

重厚長大なものはロングライフと思われるが、どうもそうではなさそうである。これまでのクルマはモデルチェンジによる買い替えという販売システムをとることもあり、あまりロングライフではなかった。長く乗られているクルマは、ミニみみたいなスマート感・小ぶり感・キャラ感のあるものが多い。「ロングライフデザイン」を推奨しているナガオカケンメイも「カワイイものはロングライフである」といっている。そういう意味で、カワイイクルマ（EV）がロングライフとなる様をより具体的に考えていきたい。また、本研究結果はいわば「大きな仮説」を提示したというものである。それを、さらなる質的/量的な調査によって実証的に深めていくことも今後の課題である。

#### 5. 発表論文リスト

工藤保則、「低炭素社会に」おける「カワイイ文化」とその可能性に関する一考察、『Zero Carbon Society 研究センター紀要』第1号、2012年